

A III部

複文(1) 条件表現(1)

A III部では出来事を条件としてとらえる方法を述べる。また、歴史をたどってバとタラの構造を解明する。条件表現の4要素の提示も行う。

A5章では、出来事が未来・現在・過去という時間のそれぞれにおいて異なる確実性のもとに認識されることを述べ、これを流れの12水域というモデルで表現する。

A6章では、バを扱う。バの歴史的形成過程をたどりつつ、バの構造形式を確定し、バの使用領域の変化を図示する。

A7章では、条件表現が時空モデル上で3段階の操作として描き出されることを示す。前件と後件の間に保たれている関係を7種類に分類する。また、バ・タラ・ナラ・トの特徴を簡単な表にする。

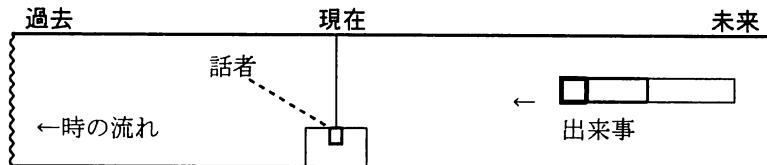
A8章では、タラがなぜ条件を表すのかを説明し、タラがバにアスペクトを導入するために生まれたバの一変種であることを述べる。バやタラの各用法が4要素の組み合わせで特定できることも述べる。

A 5章

出来事生起の確実性

A5.1 時間の流れと出来事生起の確実性

私たちは時間の流れのなかでいろいろな判断を行っている。時間は一律に未来から流れて来て、現在を通って過去へと流れて行く。時間の流れに乗せた出来事も時間の流れのままに私たちに近づき、傍を通って去って行く。初め予定・予想であった出来事も、やがて現実世界に実現し、その後記憶の中を遠ざかって行く。(図A5-1 及び『文法』第16章参照。)



図A5-1 時の流れと出来事

私たちが時間の流れの上に浮かべる出来事の舟には、3種類のものがある。
①絶対確実に生起する出来事、②生起するかもしれない出来事、③絶対に生起しない出来事、この3種類である。

例えば、①「明日がくる」という出来事は泣いても笑っても100%確実に生起し、②「来週の日曜日は晴れる」という出来事は50%(実際は1%から99%の間のどこか)の確実性で生起し、③「私は本物の鳥になる」という出来事は0%の確実性で生起する(つまり絶対生起しない)。

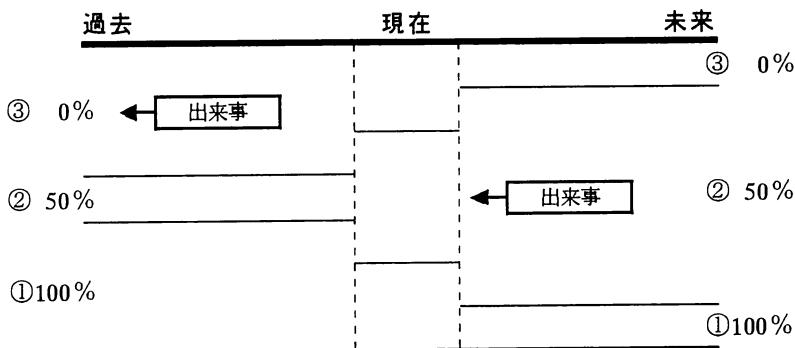
私たちが現在時点からの時間的距離において認識するすべての出来事は、この確実性3種類の出来事のうちのいずれかに属している。確実性という要素は出来事認識に必須の要素であるから、この3種類の確実性を区別して図

A5章 出来事生起の確実性

示すことができれば、文法を考えるうえで大いに役に立つはずである。

A5.2 川中三筋の流れ

この確実性の区別を、川の中に三筋の流れを設定することによって図示することにする。①「100%確実」の流れ、②「50%確実」(1%～99%確実)の流れ、③「0%確実」の流れ、の三筋の流れを設定するのである。①と③は時の流れとともに幅が広がり、②は逆に狭くなる。出来事の舟はそのいずれかの流れの上に浮かぶことになる(図A5-2)。



図A5-2 確実性三筋の流れと出来事

「現在」は瞬間であるので本来は幅を持たないのだが、図A5-2では説明の便宜のために幅を持たせてある。

図A5-2のようにすれば、どこに浮かんでいるのかで、その出来事の確実性が瞬時に見てとれる。

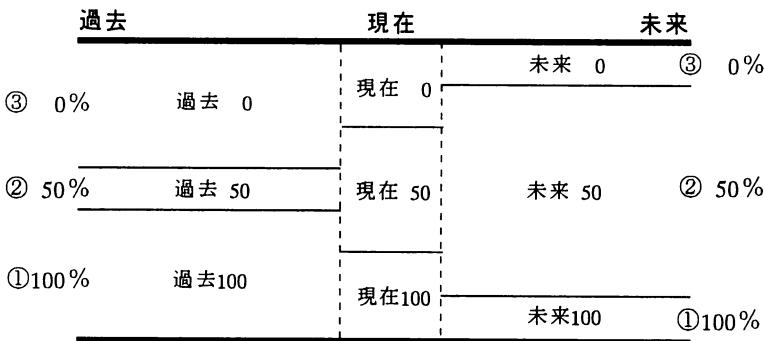
A5.3 確実性の9水域とその特性

図A5-2に示されているように、全体の流れの中にはそれぞれに特性を持つ9つの水域がある。そこで、それぞれの水域の呼び方を定めて、そのうえで各水域の特性を明らかにしておこう。

各水域の名称は機械的に決められる。「未来100」「現在100」「過去100」

A III部 複文(1) 条件表現(1)

「未来 50」などでよいだろう(図A5-3)。



図A5-3 確実性の水域図

それぞれの水域の特性は次のようになる。

[未来100] ……「今年の次に来年が来る」の出来事のように、人間の意志・願望等とは無関係に、現在に至って必ず実現する出来事の浮かぶ水域。

[現在100] ……話者が現在という瞬間に自ら体験するなどして、確実に生起しているものとしてとらえることのできる出来事が浮かぶ水域。その出来事は [未来100] か [未来 50] のいずれかから流れてくる。

[過去100] ……話者が生起したものと確信している出来事の浮かぶ水域。

[未来 50] ……「この宝くじは当せんする(かもしれない)」のように、現在に至って生起する確実性が 1%から 99%の間にある出来事が浮かぶ水域。

[現在 50] ……「川上さんは今食事をしている(かもしれない)」のように、現在生起している可能性のある出来事の浮かぶ水域。

[過去 50] ……「川上さんは先月ソウルへ行った(かもしれない)」のように、過去において生起した可能性のある出来事の浮かぶ水域。

[未来 0] ……「私は本物の鳥になる」のように、現在に至っても絶対に生起しないであろう出来事の浮かぶ水域。

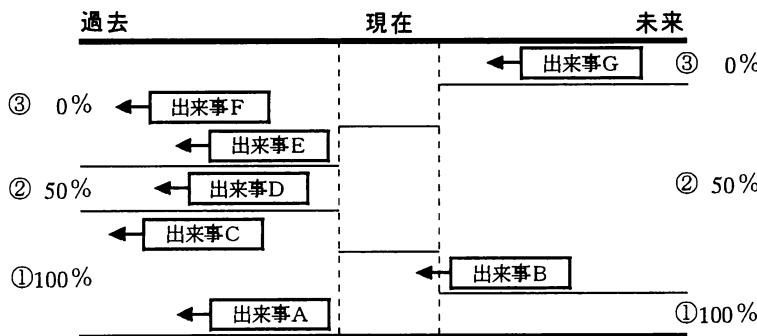
[現在 0] ……「私は本物の鳥である」,(実は晴れている状況で)「今は雨が降っている」のように、現在生起していない出来事の浮かぶ水域。

A5章 出来事生起の確実性

[過去 0] ……「私は本物の鳥だった」，（実は晴れていた状況で）「きのうは雨が降った」のように、生起しなかった出来事の浮かぶ水域。

A5.4 7つのコース

以上から、出来事の舟には通るコースがあることになる。



図A5-4 7つのコース

三筋の流れのうち、未来の②の50%確実の流れは、現在で 0%確実、50%確実、100%確実の流れに分かれる。これは「雨が降る」のように未来において50%確実な出来事のうち、現在において話者の認識世界内で生起し、話者がその生起を事実として確信できるものは動かしがたい100%確実な出来事となり、生起していないと確信できるものは 0%確実な出来事となり、降っているか、いないか確信できないものは50%確実のままとなる。……同様のこととは現在の50%確実の水域から過去に入るときにも言える。

ここから、ある1そうの出来事の舟はある1つのコースを進むことになる。コースの数は未来に3つあり、現在で2つ増えて5つになり、さらに過去で2つ増えて合計7つになる(A～Gのコース)。

図A5-4に浮かぶそれぞれの舟の進むコースについて検討してみたい。

[Aのコース] 未来100→現在100→過去100

「出来事A」は「夜が明ける」のように絶対確実に生起する出来事が生起

して過去になったことを表している（「夜が明けた」という表現になる）。

[Bのコース] 未来50→現在100→過去100

「出来事B」は「雨が降る」のような、生起するかどうか分からぬことが間もなく生起して、確実な出来事となろうとしていることを表している（「(すぐ)雨が降る」）。このコースではこのあと話者が現在において出来事が現実世界に生起したと確信できることになり、100%確実な流れに入る。

[Cのコース] 未来50→現在50→過去100

「出来事C」は「彼が来る」のような生起するかどうか分からぬ出来事について、発話者は彼の来た時点ではそのことを知らなかつたが、今は彼が来たことを知つてゐる。（「彼は來た」という表現になる）。

[Dのコース] 未来50→現在50→過去50

「出来事D」は「雨が降る」のような生起するかどうか分からぬ出来事が、生起したかどうか発話者にとって確信がもてないまま過去になったことを表している（「雨が降ったカモシレナイ」のような表現になる）。

[Eのコース] 未来50→現在50→過去0

「出来事E」は「彼が来る」のような生起するかどうか分からぬ出来事について、発話者は彼の来るべき予定の時点ではそのことを知らなかつたが、今は彼が来なかつたことを知つてゐる。（「彼は來なかつた」という表現になる）。

[Fのコース] 未来50→現在0→過去0

「出来事F」は「雨が降る」のような生起するかどうか分からぬ出来事が、期待されたある時点で結局生起しなかつた。発話者はその時点からこのことを知つてゐる（「雨は降らなかつた」という表現になる）。

[Gのコース] 未来0→現在0→過去0

「出来事G」は「私は本物の鳥になる」のような、絶対に生起しない出来事を未来において想定していることを表している。0%確実の出来事は現在・過去に至つても0%確実のままである（「私は本物の鳥になる」※過去水域では「私は本物の鳥にならなかつた」という表現になる）。

別水域への移動

過去の出来事について、例えば「雨が降らなかつた」のように「過去0」と思っていたが、家族から「雨が降つた」と聞いて、今は「雨が降つた」と確信する(過去100)ようになっているような場合、出来事の舟は「過去0」から「過去100」へと移動させられることになる。このような操作を「別水域への移動」と呼ぶことにする。

A5.5 流れからすくい上げられた出来事

以上は、出来事を発話時(現在)との緊密な関係において認識する場合である。これとは別に、出来事は時間の本流からすくい上げて認識される場合がある。過去のことでもル形で表現する「写真化・アルバム化」の場合と、繰り返される出来事を「見本化」する場合である。

a) 写真化・アルバム化

これは「現在」において生起した出来事を写真に撮って、その写真を順序よくアルバムに保管することとして考えられる場合である。写真は常にその出来事の「現在の生起中の状況」をとどめている。これを表現するのに出来事の名称が使用される。それは辞書の見出し語のようなものであり、ル形の表現となる。それで、次の日記の一部のように、過去のことでもル形をとる。

9:30 宿を出る

10:00 登山道に入る

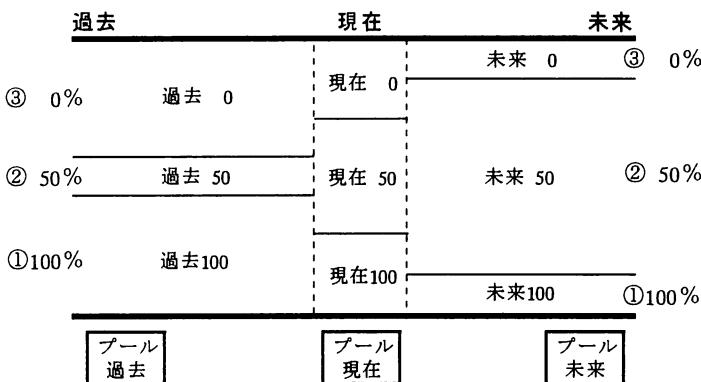
11:30 頂上に着く

ただし、これが日記ではなく予定表であれば、まだ出来事が生起していないので写真ではなく予想図となる。また、予定表であれば、同じル形であってもそれは未来のル形であり、各出来事を〔未来50〕〔未来100〕のいづれかの水域に浮かぶ舟として扱うこともできる。(これを言及線で示せば、それぞれが〔01〕ないし〔0◎〕となる。『文法』17.3①)

b) 見本化プール

「太陽は東から昇る」「10の半分は5である」のような出来事は繰り返し時間の流れに乗ってやって来る。このような定期・不定期にかかわらず何回となく繰り返し生起する出来事の舟は、そのうちの一つを「見本」として時間の本流からすくい上げて、岸のプールに浮かべておくことができる。

このプールは未来の岸にも、現在の岸にも、過去の岸にもある(図A5-5)。



図A5-5 プール設置

それぞれの岸のプールに浮かべる見本の舟は、次のようなものである。

[未来のプール] ……「(そのころは) 100万円で月旅行ができる」

「(そのころは) 17歳で選挙権がもらえる」

[現在のプール] ……「春に桜の花が咲く」(普遍の真理)

「笑う門には福来る」(ことわざ)

「食事の前に手を洗う」(習慣)

「道路は青信号で渡る」(規則)

[過去のプール] ……「(その時代は) 日本語を万葉仮名で書いた」

「(あのころは) 帰省に1日かかった」

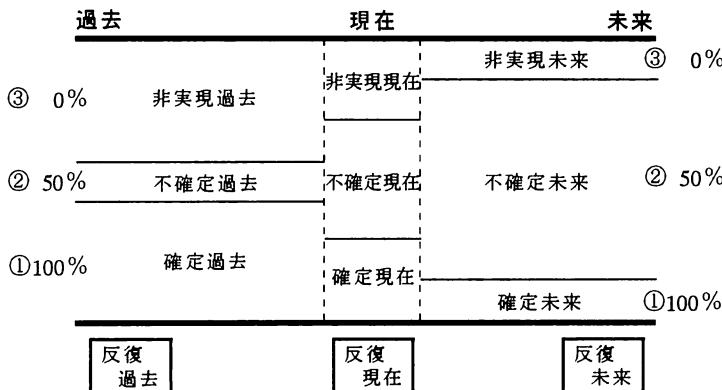
未来的のプールはプールそのものが時間とともに現在に近づく。逆に、過去のプールは現在から遠ざかる。しかし、プールは川岸にあるから移動することはできない。それで、プールを隙間なく無数に並べて設置し、見本の舟を

A5章 出来事生起の確実性

浮かべるプールを順次変えていくことにする。ただし、図示においては象徴的な3つのプールのみでよいことにする。

A5.6 12水域それぞれの名称

流れの中の9水域に3プールが加わり、計12の水域が設定された。この12水域のそれぞれに名称を与えておく(図A5-6)。



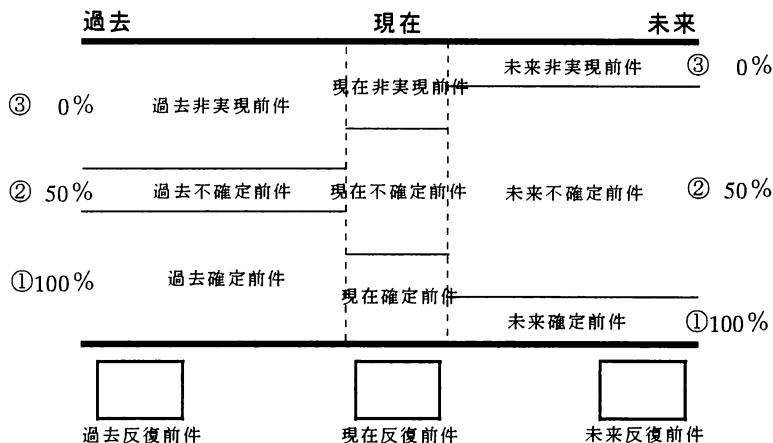
図A5-6 確実性12水域図

- [未来100] ……確定未来……出来事はやがて確実に生起する。
- [現在100] ……確定現在……出来事はこの瞬間に生起している。
- [過去100] ……確定過去……出来事は実際に生起した。
- [未来 50] ……不確定未来……出来事はやがて生起するかもしれない。
- [現在 50] ……不確定現在……出来事は現在生起している可能性がある。
- [過去 50] ……不確定過去……出来事は実際に生起したかもしれない。
- [未来 0] ……非実現未来……出来事は将来絶対生起しない。
- [現在 0] ……非実現現在……出来事はこの瞬間に生起していない。
- [過去 0] ……非実現過去……出来事は生起しなかった。
- [ノル未来] ……反復未来……出来事はやがて繰り返し生起する。
- [ノル現在] ……反復現在……出来事は現在繰り返し生起している。
- [ノル過去] ……反復過去……出来事はかつて繰り返し生起していた。

A5.7 条件表現との関連

次のA6章では条件を表すバの構造と適用領域について考えることになってい

る。 条件表現は条件を表す前件の舟と帰結を表す後件の舟とからなるが、前件の舟は、生起の確実性という観点から見るとき、12水域のいずれかに浮かぶことになる。そこで、前件に名を付け、ある水域に浮かぶ前件という意味で、それぞれの水域名に応じて、「未来非実現前件」のような呼び方にし、図A5-6 をもとに図A5-7 を作成する。



図A5-7 前件水域図 12水域の示す前件の種類

- [未来100] ……未来確定前件
- [現在100] ……現在確定前件
- [過去100] ……過去確定前件
- [未来 50] ……未来不確定前件
- [現在 50] ……現在不確定前件
- [過去 50] ……過去不確定前件

- [未来 0] ……未来非実現前件
- [現在 0] ……現在非実現前件
- [過去 0] ……過去非実現前件
- [ノル未来] ……未来反復前件
- [ノル現在] ……現在反復前件
- [ノル過去] ……過去反復前件

A 6 章

バの構造と意味

バの構造は古典語の形態をもとに知ることができ、意味はその構造に基づいて知ることができる。古典語におけるバの構造は、仮定的意味を伴う前件構造の入った包含実体を、後件述語の₀₂格に置いたものであった。後に前件が仮定的なものに限定されず、一般的な条件を表すものへと拡大した。この構造を示す。また、バの前件の出来事は、それぞれの生起の確実性に応じて、前章の12水域のいずれかに浮かぶことを示す。

A6.1 バは「むは」から……「む」は連体形……つまり構造を実体化

『岩波古語辞典』の格助詞ガの解説の項(p. 1487)を引用したい。

「浜辺よりわがうち行かば海辺より迎へも来ぬか海人の釣船」<万4044>
 「大船の思ひたのみし君が去なば吾は恋ひむなただに逢ふまでに」<万550>
 ……(引用者により1例省略)……

この場合は、用言の下に「ば」という助詞がある。つまり、「が」は「ば」と呼応している。「が」は本来体言を承けて体言にかかる助詞であったのだから、このように下に「ば」があるということは、「未然形+ば」が奈良時代以前のある時期に何らかの体言を含む形であったろうと推測される。(この「ば」は、推量の「む」の連体形と助詞「は」の結合が最古形だったのだろうと推定される($\text{muFa} \rightarrow \text{mFa} \rightarrow \text{mba} \rightarrow \text{mba}$)。この際「む」は連体形で、体言扱いとなり、その下に「は」が加わったである。)(下線は引用者による。)

※なお、同じ筆者である大野晋は「萬葉時代の音韻」(p. 325)において、この過程を次のように推測している。ここでは、「む」が -am- であること注目したい。動詞は「咲く sak-」。

sak-am-fa → sakamfa → sakamba → sakam̩ba → sakaba

上の2つの引用から分かるのは、前件の述語動詞に推量の助動詞「む -am-」がつき、この「む」が連体形(-am-u)であって、文を体言化しており、これに係助詞の「は」が関わって最終的にバ(-aba)が形成されたということである。(この「む am-」は、上二・下二段動詞に付く場合には a が消えるから、-(a)m- と表記するのが適当である。例:taye-_m-u 絶えむ <万3605>。)

A6.2 バは -(a)m- を内蔵する包含実体をハがふちどる形式

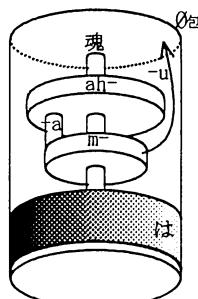
ということはつまり、例えば

^{たま}魂合はば 君来ます

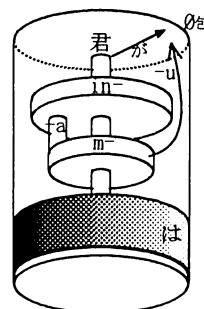
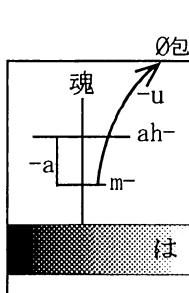
(私とあなたの魂がもし合えば、あなたはいらっしゃいます。)

(万葉集3276番の歌の一部。「^{たま}魂合はば 君来ますやと~」)

のような文の場合、「む -(a)m-」を含む文(魂 aF-am-u / 前件)の構造が包含実体の中に入っていて、この包含実体をハが「ふちどり」していたことを意味している。これを図A6-1, 図A6-2 のように図示することができる。(構造図内では音形式は音素表示となるので、ハ行子音は/h/となる。)



図A6-1 ^{たま}魂合はば(aF-am-u=θ包-Fa) 図A6-2



図A6-3 君が去なば

なお、A6.1 の初めの部分に引用されている歌(万550)の「君が去なば」の部分は図A6-3 のように示せる。「君」という体言と「去なむø包」という体言が「が」で結ばれている。(この「が」は古典語において「の」と同じ機能を持っていた。『岩波古語辞典』p. 1485) 「君」という実体はもちろん主格にある。

A6.3 前件の包含実体は後件の属性に対して「 \emptyset_2 格」に立つ

構造を包含実体の中に入れるのは、構造を他の構造の中に組み込むためである(『文法』6.4~6.6)。ということは、その包含実体は、組み込み先の構造の中で、属性に対して何らかの格に立っているはずである。

では、この包含実体($aF-am-u=\emptyset包$)は、組込先であるバの後の文(君来ます／後件)の述語動詞(来る $K-$)に対して何格に立っていたのであろうか。

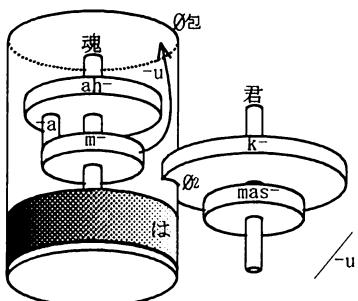
$aF-am-u=\emptyset包-\underline{\emptyset}_2-Fa$ 合はば -aba

前件は後件の生起する状況・時を示していると考えられるので、前件は二格ないし \emptyset_2 格(『文法』2.7)に立っていたものと考えられる。しかし、二格詞が省略されることはあるので、本章冒頭に引用した大野の記述に二格詞への言及がないからには、 \emptyset_2 格に立っていた可能性が高い。

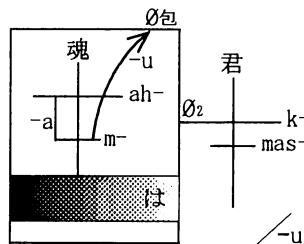
$aF-am-u=\emptyset包-\underline{\emptyset}_2-Fa$ 合はば -aba

(二格と考える場合は $aF-am-u=\emptyset包-\underline{\emptyset ni}-Fa$ <合はむøniは> 合はば)

とすれば、バに関わる構造は図A6-4、図A6-5 のようなものとなる。



合はば($aF-am-u=\emptyset包-\emptyset_2-Fa$)



図A6-4 魂合はば 君来ます 図A6-5

(「ます」は上代の補助動詞で尊敬の意を表していたが、平安時代には使われなくなった。現代語の助動詞 =mas- と直接の関係はない。)

バは国語文法のような表層レベルの文法では「接続助詞」と呼ばれ、2つの文を接続する機能を持つとされるが、バにその機能がある理由がこれで明らかになった。前件が包含実体を形成しており、その包含実体が後件の述語動詞と「格」の関係にあったのである(A17.1③)。

A6.4 -(a)m- の構造形式

-(a)m- は『文法』で定義されている「助動属性」でも「態属性」でもない。

仮に、=mas- のような助動属性なのであれば、元来動詞なので、動属性とは -(i)= を介して描写され、sak-i=m- となるはずである。

また仮に、-(s)as- のような態属性なのであれば、関わる実体と格関係を持つはずであるが、A-ni/o sak-am- のような格関係を要求するわけではない。

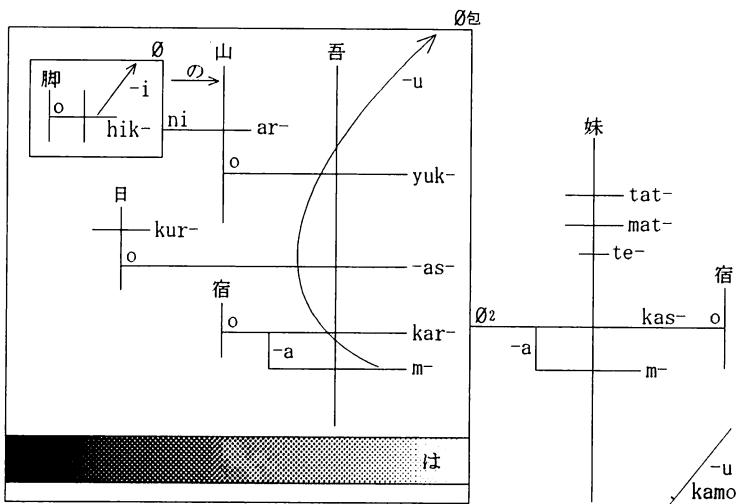
似ているところがあるのは否定属性 -(a)na.k- (『文法』26.3)で、両者とも動属性に接触する。否定詞 -(a)na.k- では、-(a)na の部分が動詞に直接接触(「接合」A17.1⑤)し、sak-ana.k- となる。一方、-(a)m- では (a) の部分が動詞に直接接触し、sak-am- となる。

それで、構造形式は否定属性にならって、図A6-4、図A6-5 にあるような形にすることになる。ただし、-(a) が実体ではないという点は否定属性の -(a)na- と異なっている(参考 : sak-ana-θi sugi-ru)。

このような形式をもつ属性は現代語にはないので、この属性の形式を現代語の構造形式の体系の中に位置づけることはできない。-(a)m- は古典語の中で推量を表す助動詞(?)なので、仮にこれを「古典助動属性」と呼ぶ。

A6.5 バを含む構造実例図示

ここで一つの歌の構造実例を簡略表示で示しておく(図A6-6)。この例では、「借らば kar-am-u=θ包-θ2-Fa」が使用されている。文末の「かも」は願望を表している。kas-am-u の -u は実体修飾描写詞である。



図A6-6
 あしひきの山行き暮らし宿借らば妹立ち待ちて宿貸さむかも 〈万1242〉
 (山を歩いていて日が暮れ、宿を借りたら、いい女が立ち迎えて宿を貸してくれないだろうか。)

A6.6 バの本来の意味……「む」の意味+「は」の意味

バ(-aba)は「む -(a)m-」と「は」で構成されていることが分かった。次に、その意味について考えてみたい。

a) 「む」の意味

この「む」は「推量の助動詞」であるが、『岩波古語辞典』(p. 1479)には「む」の連体形の用法の中で……(中略)……仮定に関する話題の文では、動詞ごとに「む」を加えて、話が仮定であると明示する語法が広く行われていた。

とある。2例を引用する(現代語訳は筆者……以下同様)。

しかもは
飾磨川絶えむ日にこそ我が恋やまめ 〈万3605〉

(飾磨川がもしも絶えるときでもあれば、私の恋も止むだろうが。)

思はむ子を法師になたらむこそ心ぐるしけれ <枕9>

(子どもをかわいく思っていたとして、その子を僧侶にしたとしたら、
それこそ(親が)気の毒なものだ。)

つまり、古代語において、この -(a)m- には連体形(-(a)m-u)の用法として「もしも……なら」という仮定を示す用法があったというわけである。いま考察の対象としている -(a)m-u はまさに連体形なのであるから、ここで扱っている 「む」 にはもともと仮定の意味が含まれていたわけである。

b) 「は」の意味

「は」は実体に「ふちどり」を施す機能をもち、この機能により「主題」化と「対比」が実現される(『文法』3.1③)。ふちどりの内部に重点がある場合には「主題」が示され、外部に重点がある場合には「対比」が示される。両方に均等に重点がある場合には「対比しつつ主題を示す」ことにもなる。

さて、この主題化が、意的的には「条件」の提示をもたらすことがある。

『岩波古語辞典』(p. 1496) では

また「は」は、一つの条件の提示となることがある。

として、次のような例を挙げている。

恋ひ死なむ後は何せむ生ける日のためこそ妹を見まくほりすれ <万560>

(恋い死んだらそれで終わりです 生きている間のためにこそあなたに
逢いたく思いますのに)

『日本文法大辞典』(p. 668)でも、「は」の機能として3項を掲げており、それは①主題提示、②対比、③条件提示、という形にまとめることができる。

「は」には「条件」提示の機能があるのである。

c) バの本来の意味……「む：仮定」+「は：条件」

バは、そこで、こういうことになる。「む」を含むことから「仮定」を提示し、「は」を含むことから「条件」を提示する。バ (-aba) は本来この両者、「仮定の条件」を提示するものだった。

A6.7 已然形もバを伴うようになる……バの意味の拡張

古代語において、活用語に「已然形」というものがあって、それは「既定条件」を示すものだった（『岩波古語辞典』p. 1501）。

いへざか わざも とど
家離りります我妹を留めかね山隠しつれ心どもなし <万471>

(家を離れて行ってしまう妻を留めきれず山に葬ってしまったので気力もなくなった)

「已然形」はもともと既定の「条件」を示していたので、バを必要とはしなかったのだが、実際はバを伴うようになった。バ(-aba)はいま見たように、
-(a)m-u=Ø包-Øz-Fa

という形から生まれたもので、已然形とは関係がなかった。しかし、バが仮定の「条件」を表す状況になっていたので、已然形も、自分の表現する内容が「条件」であることをより明確にするためにバの形式を借りるようになった（『日本文法大辞典』「ば」の項参照）。

この結果、「已然形+バ」という形式が「既定条件」を表すようになり、「確定条件」（すでに…だから）、「恒常条件」（…ので）、さらに「いつも…すると」そして、単に「…すると」をも表すようになった。

単に「…すると」を表すようになって、「已然形+バ」が仮定条件を表す一般的な語法となり、今日に至っている。

已然形が本来無関係のバを伴うようになった結果、バの提示できる範囲が広がり、本来のバの意味が「仮定条件」であったところに「既定条件、確定条件、恒常条件」が加わることになった。

A6.8 バの構造変化……包含実体内の“-a”に“-e”が代入される

このバの提示できる範囲に広がりが出た事実は、構造形式の面から見ると、未然形のもとで形成されたバの構造を已然形が借用したものとしてとらえることができる。

已然形は次のような形をしている。

咲く → sak-Ø / 着る → ki-re / 明く → ak-ure

これらの形式をまとめて表記すれば $-(u)r)e$ となる。この形式が何に由来するのかは、現在まだ明らかになっていない(大野1978, p. 211)。

この已然形が

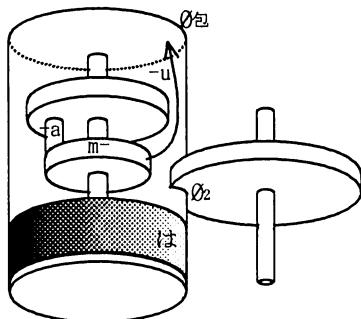
$$\text{バ } -(a)m-u=\emptyset\text{包}-\emptyset_2-Fa$$

の構造(図A6-7)の包含実体の中に $-(u)r)e$ で入り込んだわけで、つまり、 $-a$ の位置に自分を置いて

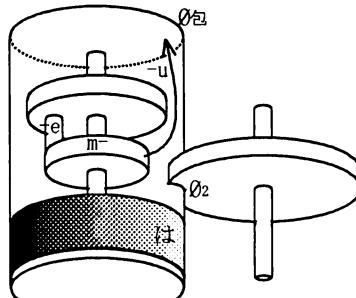
$$-(u)r)e m-u=\emptyset\text{包}-\emptyset_2-Fa$$

という形式を実現したわけである(図A6-8, $-(u)r)e$ の部分を $-e$ と簡略化)。

描写形式は $-(r)eba$ となった。



図A6-7 ば(-am-u=\emptyset包-\emptyset_2-Fa)



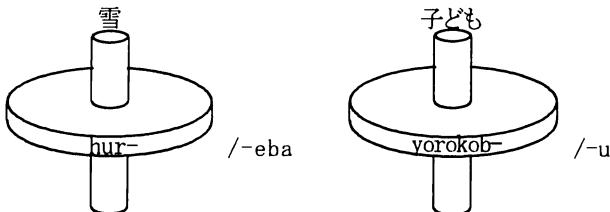
図A6-8 ば(-(u)r)e m-u=\emptyset包-\emptyset_2-Fa)

ここに新しい「む」が形成された。本来入り込む資格のない形式が強引に割り込んだのであるが、これが可能であったということは、あるいは已然形の中にこれを可能とするしかるべき要素が潜在していたことを意味するかも知れない。

A6.9 現代語のバの構造とニュアンス

現代語のバは「-(r)eba」という形式をしている(mi-reba, hur-eba)。これは、つまり、構造は図A6-8でよいことを意味している。しかし、構造を考える際に、そのつど $-em$ -属性、包含実体、「は」などを構成しなければならないのは煩わしい。それは $-(r)eba$ という形態からかけ離れているように見える。そこで、本来は図A6-8のような構造であることを承知しつつも、実際

上は図A6-9 のような構造形式で表すとよいのではないかということになる。



図A6-9 雪が降れば、子どもが喜ぶ

前件と後件の構造を独立したものとして扱い、その両者の間に -(r)eba (仮定描写詞、『文法』5.2) を置くことにするのである。しかし、独立構造として扱っても、前件の構造は元来包含実体内にあったものであることを銘記したい。

バは組み込まれているハのために前件を主題化している。そのため前件は主情性を帯びており、「(実現を目的とする)後件成立のためには前件成立で十分である」等のニュアンスを持つ。「さえ」を併用することにより(「～さえ～ば～」の形で)主情性を増幅することができる。

A6.10 バは基本的に主題化された「仮定前件」を表す

バは元来 -aba という形式で主題化された「仮定条件」を示していた(A6.6)が、-(r)eba という形式になって主題化された「確定条件」等も示すようになった(A6.7, A6.8)。しかし、現代語においてはバが確定条件を示すことは制限されるようになり、再び仮定条件を示す本来の機能に戻っている。ただし、形態は -aba に戻らず -(r)eba のままになった。(古典語での確定条件は、現代語ではタラくバ>ないしノデ・カラの表現をとるようになっている。)

- 現代語では確定条件的な前件をバが担うのは、主として次の場合である。
- 1) 前件が後件成立のための十分な理由を示す慣用的な表現である場合

「ああいう人であればこそ、皆に好かれるのだ」

- 2) 前件が評価的後件成立のための十分な条件であることを示す場合

「これだけできれば、合格だ」

A III 部 様文(1) 条件表現(1)

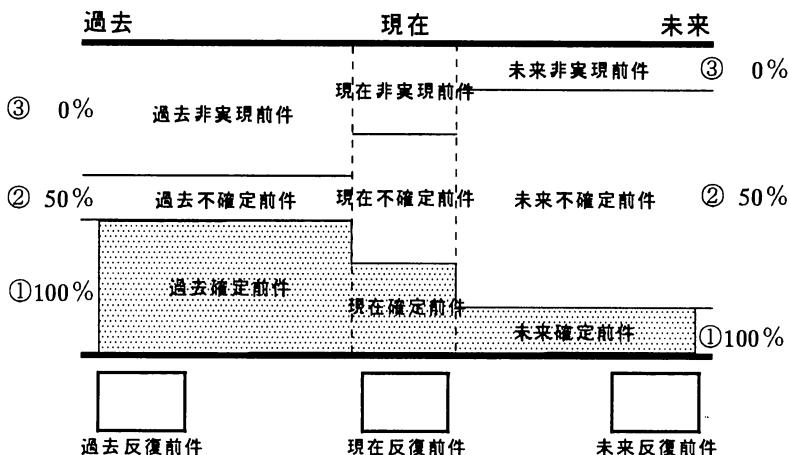
3) 後件が意外性・非難等、何らかの情動的ニュアンスを伴う場合

「自分で謝りに来るかと思えば、こんなペーペーをよこした」

A6.11 バの領域をモデル図で示す

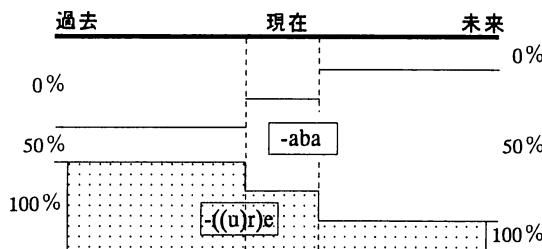
バの成立の経緯と使用領域の変遷を時空モデル図を用いて示してみる。

- まず、初めは図A6-10の網掛け部分は已然形 $-((u)r)e$ で表されていた。
(ただし、未来については未確認。) 非網掛け部分は $-aba$ で表されていた。



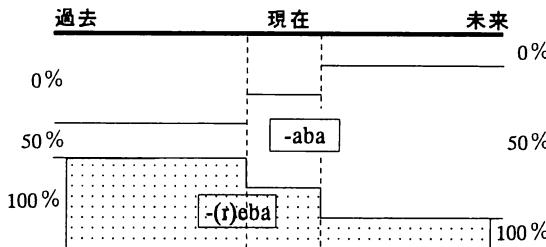
図A6-10

1) の図A6-10を簡略化したものを図A6-11として示す。



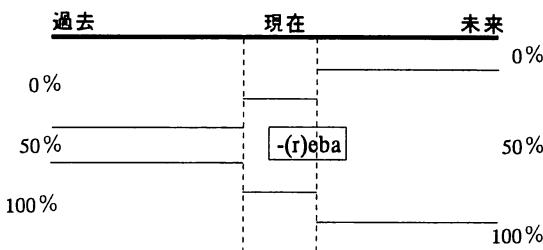
図A6-11

2) 網掛け部分に ba が適用されることになり、-(r)eba が生じた。



図A6-12

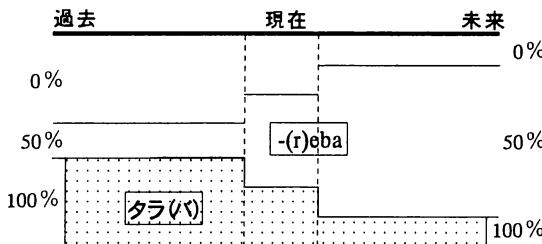
3) 非網掛け部分の -aba を -(r)eba が征服。全体が -(r)eba になった。



図A6-13

4) 網掛け部分は「基本的に」タラ(バ)が表示するようになり、この部分では -(r)eba は制約を受けることになった。これが現在に至っている。

この網掛け部分では -(r)eba は前件述語が動作性のものである場合、
①後件に「依頼・勧誘・命令・禁止」の主体的表現をとりにくく、さらに②前件・後件の主語が同一のとき、後件に「意志・忠告」の主体的表現をとりにくくなつた。これは、そのような後件が前件の仮定性(バ)よりは具体性・実現性(タラ)を重視しているためと考えられる(A7.10)。



図A6-14
ただし、タラ(バ)
はすべての領域で
使用可。

なお、タラ(バ)は、図A6-14において100%のところに限定されているが、これはバとの対比という視点から見ての結果であって、タラ(バ)のみに着目すれば、どの領域でも使用可能という図になる。その場合、50%，0%の領域ではバと重なることになる。バとの違いは具体性・実現性(・意外性)の強さにあるといえる(A8章)。

バは『文法』(5.2 表5-6)では「仮定描写詞」と名付けたが、以上から明らかなように、構造的には「条件基」と呼ぶ方がより適切であるだろう。

モシの構造形式

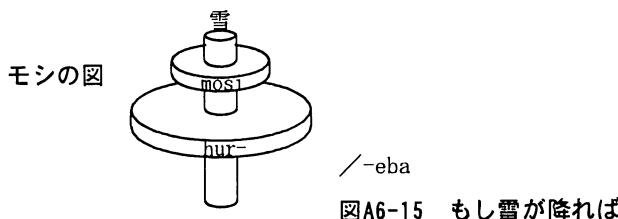
「もし」について『岩波古語辞典』にこうある。

モは助詞モと同根か。不確定・不確実の意を表す。シは
シク活用形容詞の終止形語尾に同じ。

さらに、「もしくは」の項にこうある。

モシを活用させた連用形モシクと助詞ハとの複合
つまり、モシは不完全ながらも、形容詞「悲し」と似た構造を持つ
ようである。それで、モシを属性の一種として扱うことにする。ただ、
これは形容属性ではなく、化石化してしまった特殊な属性である。

このモシは、その主体と属性の結合が不確実なものであるという意味を示す機能がある(A7.3②も参照)。構造図は簡単に下図のようにしておく(本来は図A6-7、図A6-8 の包含実体の中)。



A6.12 現代語のバの前件を12の各水域に浮かべた表

参考までに、バの前件を図A5-7で示した12の各水域に浮かべてみる。

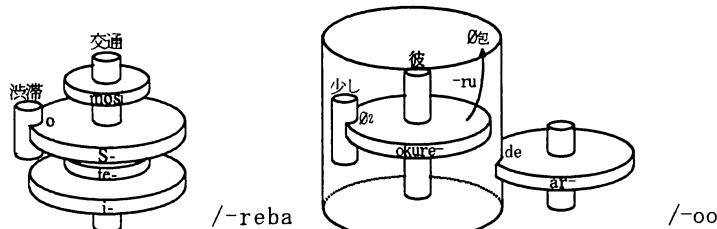
12水域に浮かぶバの前件

表A6-1

[未来100] 確定未来（前件はやがて確実に生起する） [未来確定前件] <u>明日になれば</u> 、結果が分かります。
[現在100] 確定現在（前件はこの瞬間に生起している） [現在確定前件] <u>これだけ資料があれば</u> 、いいものが書けます。
[過去100] 確定過去（前件は実際に生起した） [過去確定前件] <u>あれだけ雨が降れば</u> 、当分水の心配はいらない。
[未来 50] 不確定未来（前件はやがて生起するかもしれない） [未来不確定前件] <u>(もし)この宝くじが当たれば</u> 、旅行に行ける。
[現在 50] 不確定現在（前件は現在生起している可能性がある） [現在不確定前件] <u>(もし)渋滞していれば</u> 、彼は少し遅れるだろう。
[過去 50] 不確定過去（前件は実際に生起したかもしれない） [過去不確定前件] <u>(もし)彼が彼女に会えば</u> 、それを話しただろう。
[未来 0] 非実現未来（前件は将来絶対生起しない） [未来非実現前件] <u>(もし)彼が20歳若くなれば</u> 、私は彼と結婚する。
[現在 0] 非実現現在（前件はこの瞬間に生起していない） [現在非実現前件] <u>(もし)私があなたであれば</u> 、留学する。
[過去 0] 非実現過去（前件は生起しなかった） [過去非実現前件] <u>(もし)この本を読めば</u> 、私の人生は変わった。
[ノル未来] 反復未来（前件は将来繰り返し生起する） [未来反復前件] <u>(将来は)スーパーに行けば</u> 、パソコンが買える。
[ノル現在] 反復現在（前件は現在繰り返し生起している） [現在反復前件] <u>5に3をたせば8になる</u> 。
[ノル過去] 反復過去（前件は以前繰り返し生起していた） [過去反復前件] <u>(当時は)ここに上がれば</u> 、富士山が見えた。

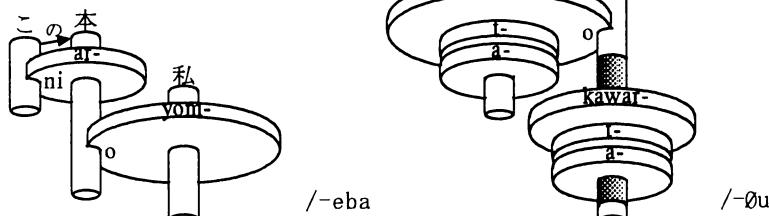
条件文実例構造図示

[現在不確定前件]



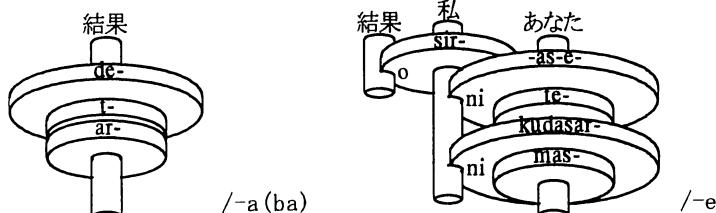
図A6-16 もし渋滞していれば、彼は少し遅れるだろう。

[過去非実現前件]



図A6-17 この本を読めば、私の人生は変わった。

[未来確定・不確定前件]



図A6-18 結果が出たら(ば)知らせてください。

タラ(バ)についてはA8章参照
～テクダサイについては『文法』37.7, 39.7②

A 7 章

条件

A7.1 条件表現は前件・後件より成る

ここでは条件表現を考えるために仮定描写詞「バ - (r) eba」を使用する。バを使用するのは、後述するように、タラ(バ)もナラ(バ)もバの一変種であるからである。

条件表現は

<u>春が来</u>	れば,	<u>桜が咲く</u>
<u>haru-ga ku-</u>	reba,	<u>sakura-ga sak-u</u>
[前件]		[後件]

のように、必ず前件と後件で成り立っている。

ここに現れる前件と後件は、基本的に因果の関係にある。しかし、条件表現は、因果の関係の存在すること自体を表明するためにあるわけではない。条件表現は、原因・理由・契機となる前件が成立してはじめてその結果・帰結としての後件が成立するということ、後件の出来事が生起するためには前件の出来事の生起が前提となるということ、を表している。

前件・後件は、時空モデル(『文法』第16章)で表すときには、時の流れに浮かぶ2 そうの舟、「前件の舟(Z)」と「後件の舟(K)」になる。

この2 そうの舟は、基本的に因果関係というロープでつながれている。図示に際しては、このロープをZからKへ向かう矢印で表示する(図A7-1)。



図A7-1 春がくれ(Z)ば、桜が咲く(K)

前件の舟は12水域のどこかに位置をとる(A5.7, 図A7-2)。確定前件である場合もあれば、不確定前件である場合も、非実現前件である場合もある。

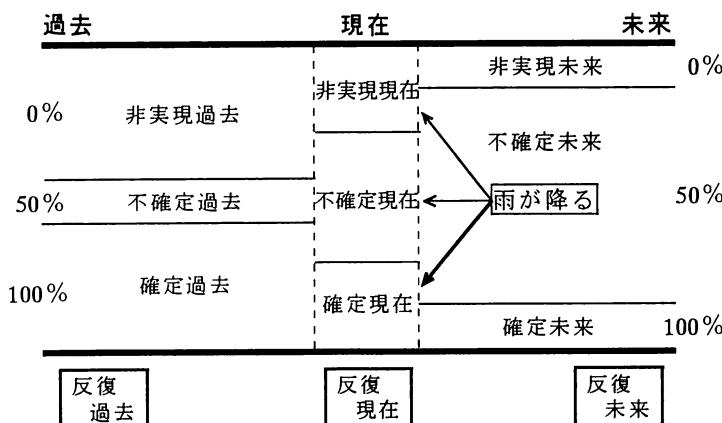
A7.2 前件の成立を待ってはじめて後件が成立する

条件表現は、上述のように、前件が成立してはじめて後件が成立するということを伝えようとするものである。

時空モデルではある出来事が成立するということを、出来事の舟が現在時点において確定水域(100%)に入ることとして表現している。例えば、

A7-1> 当日は雨が降る。

という文がある場合、出来事「雨が降る」は、生起の確率が高い場合もあるが、本当に生起するかどうかは、当日になってみないと分からない。当日になるまでは、この出来事の舟は不確定未来水域(50%)にいる(図A7-2)。当日になって実際に雨が降れば、この舟は確定現在水域(100%)に入る。当日になっても、話者が地下室で寝起きしているなどで、雨が降っているかどうか判断できない状況にいれば、この舟は不確定現在水域(50%)に入る。当日雨が降らなければ、この舟は非実現現在水域(0%)に入る。



図A7-2 「雨が降る」が生起すれば、確定現在水域へ

条件表現は、「前件が生起してはじめて後件が成立する」ことを伝えよう

とするものなのであるから、「前件の舟が確定現在水域に入ることが前提」になっている。前件の舟がその水域に入った場合に、前件が後件と結びつく資格を得るわけである。……それで、「条件」とは、次節のような一連の手続きとして考えることができる。

A7.3 「条件」とは時空モデル上に示される一連の手続き……「仮定条件」

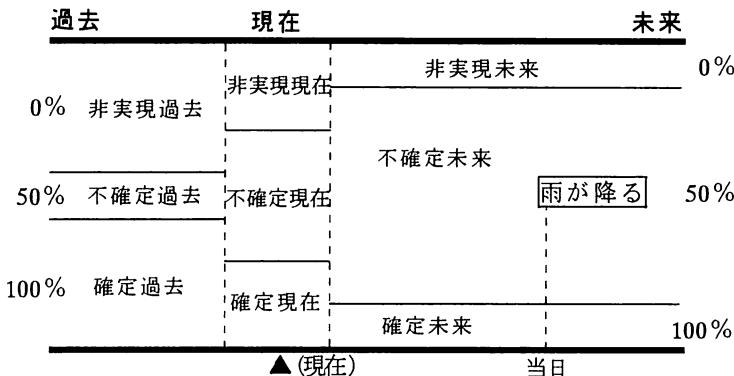
条件には、前件の舟がどの水域にあるかによって、「仮定の条件」(0%, 50%)と「確定の条件」(100%)がある。「確定の条件」については A7.7 で扱うこととし、まず「仮定の条件」から考えてみる。

たとえば、次の文

A7-2> 当日雨が降れば、登山を中止する。 hur-eba

では、前件(当日雨が降る)の舟が不確定未来の水域(50%)にいるので、バは前件を仮定条件として示している。さらに、バはこの前件の出来事が生起してはじめて前件が後件と関わりを持つ資格を得ることを示している。

「当日雨が降る」という不確定(50%)の出来事を図A7-3 のように表す。



図A7-3 当日雨が降る

▲は話者の位置(発話時点)すなわち現在時点を表している。

「当日雨が降る」という文の時空モデルがこのようであるとき、バを付けることによって私たちはどんなことをするのだろうか。

バを付けることによって、次の操作を実行することになる。

① 条件実現時点(△)を設定する。

条件実現点は擬似的な現在点である。設定位置は「当日・あす・来週・昨年」等の語や文脈により決定される。条件実現時点を実現点と呼んでもよい。

② その条件実現時点において、前件の舟を確定水域に移動させる。

実現点(擬似現在点)において前件の出来事が生起したものとする(仮想化)ために、前件の舟を確定水域に移動させる。舟は仮想の舟となるので、点線で表示する。前件は後件と結ばれる資格を得る。(モシはこの操作②実行への意志表明となる)。

③ 前件と後件を因果のロープで結びつける。

前件(因)の舟と後件(果)の舟を因果のロープ(太い矢印)で結ぶ。

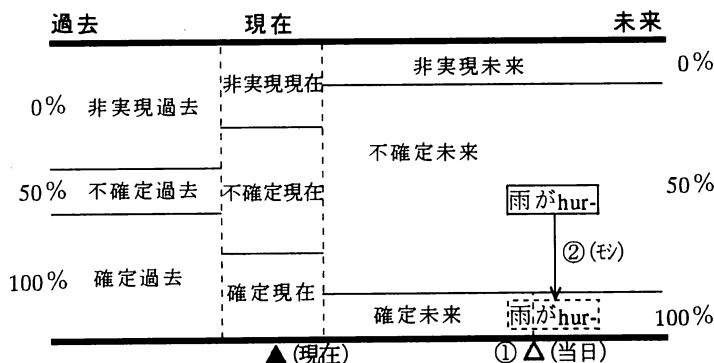
前件(原因・理由・契機) → 後件(結果・帰結)。

前件が仮想であれば後件の帰結も仮想となるので、後件の舟も点線で表示することになる。確定条件は仮想ではない(A7.7)。

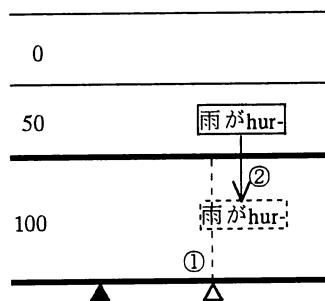
A7.4 バ操作の図示

バは上の枠内の①②③の操作として時空モデル上に示される。①の操作は実現点(△：擬似現在点)の設定、②の操作は前件の仮想化(前件の舟の確定水域への移動)である。この移動を細い矢印線で表示する。予定・予想の舟は移動先では仮想の舟となる。仮想の舟を点線で示す(図A7-4)。

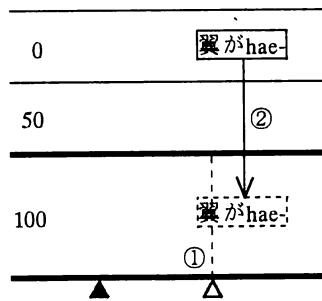
この図A7-4 に示されている①②の操作の図示のしかたを図A7-5 のように簡略化する。すると、例えば「体に翼が生えレバ (hae-reba)」のような非実現水域(0%)に設定される出来事は、図A7-6 のように図示されることになる。



図A7-4 当日雨が降れば バ①②の操作

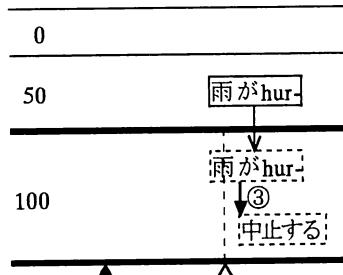


図A7-5 当日雨が降れば バ①②

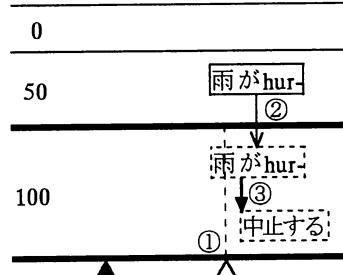


図A7-6 翼が生えれば バ①②

操作③は前件と後件を因果のロープで結ぶ操作である。簡略図で示せば図A7-7 のようになる。仮想の上に成立する後件の舟も点線で示す。



図A7-7 雨が降れば、中止する バ③



図A7-8 バ①②③

①②③の操作をすべて表示すれば図A7-8 となる。

舟の表示法について……舟が「現実世界(現実的判断の行われる認識世界)」にあるものとする場合は、予定・予想(未来)及び既定(現在・過去)のいずれにおいても、確実性がどの程度であっても、実線で表示する。一方、②の操作の結果、前件が「仮想世界(仮想的判断の行われる認識世界)」にあることになった場合は、前件の舟を点線で表示する。また、仮想の前件に対する帰結の後件も仮想世界にあるものとし、後件の舟も点線で表示する。

A7.5 後件の舟の時間的位置

前件の舟に対する後件の舟の時間的位置は、次の3通りがある。

- 1) 後にある場合
- 2) 前にある場合
- 3) 同時にある場合

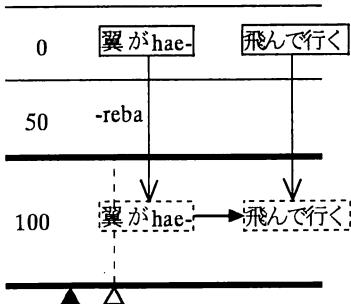
1つずつ検討してみたい。

1) 後件の舟が前件の舟より後にある場合

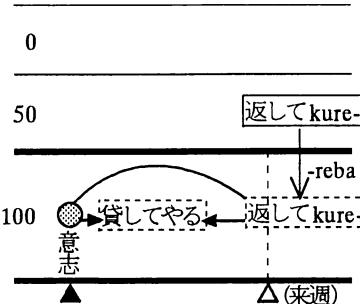
A7-3> 体に翼が生えれば、君のところへ飛んで行く。

この文の前件の舟は現実世界では未来 0%にある。この舟を確定領域に移動して仮想世界に存在するものとする。後件は、仮想世界では意志を伴い、確定領域にある舟となるが、現実世界では未来 0%の領域にある。つまり、後件も他領域(未来100%)への移動を施されたものになっている(図A7-9)。

時間的には、翼が生えたあとで飛んで行く、ということだから、後件の舟が前件の舟より後に生起する。これは、条件表現の一般的な先後関係である。



図A7-9 翼が生えれば、



図A7-10 来週返してくれれば、

2) 後件の舟が前件の舟より前にある場合

次の文では、前件の舟は未来50%の水域にある。

A7-4> 来週返してくれれば、この本貸してやる。

後件の舟は(直近)未来100%ないし50%にあると考えられる。舟の先後関係は、前件(来週返してくれること)が後で、後件(貸してやる)の方が先になる。図A7-10 のように図示できる。

条件表現は前件の生起が実現してはじめて後件が成立することを表現するものであるから、この場合は逆のようにみえ、原則から外れているように見える。(太い因果の矢印が逆の左を向くことになる。)

しかし、前件(来週返す)は意思によるコントロールが可能な出来事であり、それを実現させようという意志が発話時点で形成されていると考えられる。その場合には、前件(来週返す)そのものの生起ではなく、前件を生起させる「(来週返す)意志」の存在が前件の生起と同じこととして認識される。この前件実現への意志が発話時点に存在していて、これが後件を導いているのだと考えれば、前件が2つの部分に分離していると考えられ、原則に合うことになる。(太い因果の矢印が右を向く。)

次のような場合も同様のこととして考えることができる。

「あなたがその大学院を受験すれば<後>、私は推薦状を書きます<先>」

「あなたが歌えば<後/先/同時>、私も歌います<先/後/同時>」

3) 後件の舟が前件の舟と同時に存在する場合

A7-2> 当日雨が降れば、登山を中止する。

この文はA7.3から扱っているもので、すでに図A7-7 に図示されている。後件「中止する」は、前件「雨が降る」の舟の位置と並んでいる。雨の降り続く長さはさまざまであろうが、降り始めた後のある時点で中止を決定するので、その時点では前件・後件が同時に生起することになる。(「中止する」は瞬間の出来事なので、後件の舟は本当は長さを持たないが、図示では文字を入れる必要から長くなっている。)

「中止する」は現実世界では、雨が降るかどうか分からないので、未来50%の領域にある。(図A7-7では、説明の都合上、この後件が確定水域へ移動されたものであることは示していない。)

以上のように、前件に対する後件の舟の時間的位置は3通りある。

なお、後件の舟は絶対テンスで(つまり▲からの矢印で)表現される。

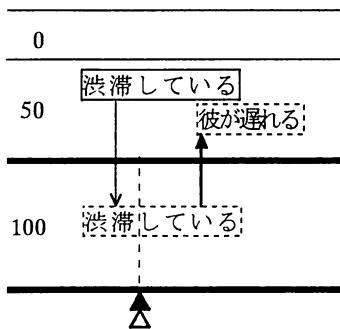
A7.6 現在・過去の水域の「仮定条件」

これまで、未来の水域に前件の舟がある仮定条件を検討してきた。現在・過去の場合の仮定条件として考えられるのは次の 1)~4) である。簡単に図示しておきたい(1)以外の説明は省略する)。

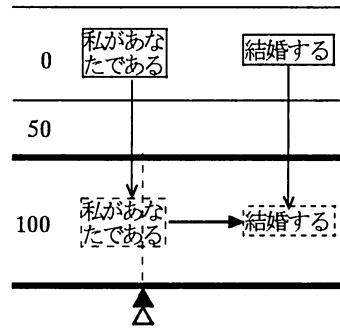
1) 現在50% (現在不確定前件)

A7-5> もし渋滞していれば、彼は遅れる(だろう)。

これを図示すれば、図A7-11となる。現在の仮定条件の場合は実現点(△)が発話時点(▲)と重なる。この例文の場合、後件「彼は遅れる」は現実世界でも未来50%にあると考えられるので、水域の移動は行われていない。



図A7-11 渋滞していれば、遅れる



図A7-12 私があなたであれば

2) 現在 0% (現在非実現前件)

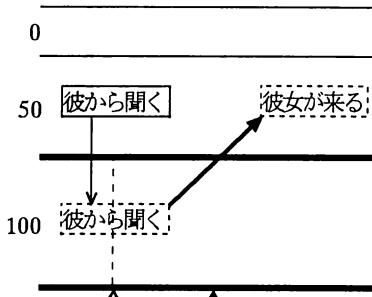
A7-6> もし私があなたであれば、あの人と結婚する。(図A7-12)

3) 過去50%（過去不確定前件）

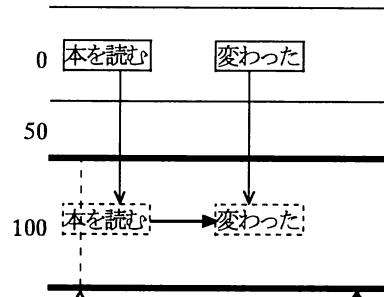
A7-7> もし彼から今日のことを見ければ、彼女は来る（はずだ）。(図A7-13)

4) 過去 0%（過去非実現前件）

A7-8> あのころこの本を読めば、私の人生は変わった。(図A7-14)



図A7-13 彼から聞けば、



図A7-14 この本を読めば、

A7.7 「確定条件」の場合は②の操作は不要

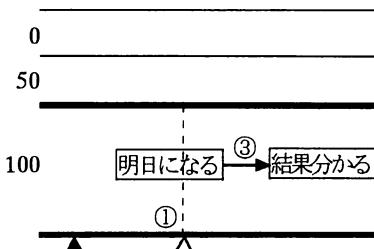
「仮定条件」の場合は以上に見たとおりである。次に「確定条件」の場合について検討しておきたい。確定条件には3通りの場合がある。

- 1) 未来100%
- 2) 現在100%
- 3) 過去100%

ただし、すでに確定条件を扱うことには制限がある(A6.10)。後件に「～したい」等の主体的表現も置きにくい(A6.11 ④)。

1) 未来100%の場合（未来確定前件）

A7-9> 明日になれば、結果が分かる。



図A7-15

明日になれば、結果が分かる

出来事「(時が)明日になる」は(24時間以内に)確実に生起する。したがって「条件」を示す操作①②③のうち②(仮想化・前件の舟を確定水域へ移動)の操作は不要で、前件の舟はすでに後件の舟とつながる資格を得ている。操作②がないのだから、操作②への意志表明である「もし」は使えない(A7.3 ②)。必ず実現する前件が実現した後で、後件が実現する、という意味を表す(図A7-15)。

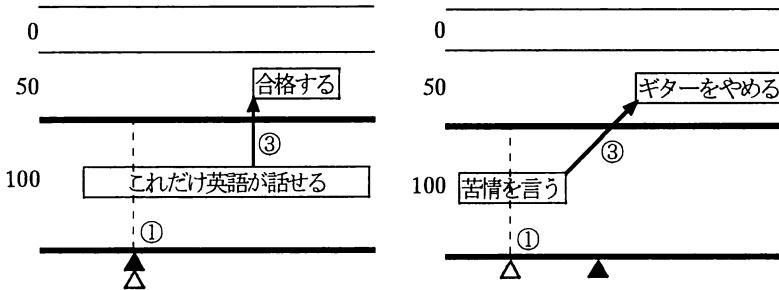
2) 現在100%の場合 (現在確定前件)

A7-10> これだけ英語が話せれば、君は合格する(だろう)。

出来事「これだけ英語が話せる」が今生起しているから「合格する(だろう)」が結果として生起する、という意味(図A7-16)。

実現点が現在点と重なる。現在100%の場合は①の操作もいらないことになる。必要な操作は③だけ、つまり因果のロープで前件と後件とをつなぐだけ、ということは「ので・から」(A7.11)に非常に近いことになる。

A7-11> これだけ英語が話せるから、君は合格する(だろう)。



図A7-16 これだけ英語が話せれば、図A7-17 彼女があれだけ苦情を言えば、

3) 過去100%の場合 (過去確定前件)

A7-12> 彼女があれだけ苦情を言えば、深夜のギターはやめるだろう。

出来事「苦情を言う」が過去において生起した。それで後件出来事「ギターをやめる」が生起することになる(図A7-17)。

A7.8 前件－後件間にある7種類の因果関係

前件と後件の関係は基本的に因果の関係であるが、その内容を細かく見ると、次の①～⑦の関係として分類できる。実際の条件表現内に見られる関係は、必ずどれか1つに分類できるというものではなく、視点が変われば別の分類項に入れられる場合もある。

① 「前件－後件」が「状況－普遍的帰結」の関係

前件が生起する状況では、自然の法則によって後件が生起するもの。

A7-13> エビはゆでれば、赤くなる。

A7-14> 風邪を引けば、熱が出る。

A7-15> 両親ともO型であれば、子どももO型になる。

② 「前件－後件」が「状況－規則・習慣的帰結」の関係

前件が生起する状況では、社会的・人間的な法則によって後件が生起するもの。因果関係は本人にしか分からぬこともある。

A7-16> 信号が青になれば、渡ることができる。

A7-17> 彼は酒に酔えば、裸で踊り出す。

A7-18> 自社の飛行機に乗れば、必ずコックピットに顔を出す。

③ 「前件－後件」が「状況－個別的帰結」の関係

前件の生起が、個別的な関係で、個別的な帰結をもたらすもの。

A7-19> このことを知らせれば、きっと喜んでくれる。

A7-20> 銀メダルになれば、悔しがるよ。

A7-21> あのころこの本を読めば、人生は変わっていた。

④ 「前件－後件」が「先に生起開始の事象－後に生起開始の事象」の関係

前件・後件の関係よりは、生起の順序の方に関心があるもの。

A7-22> 冬が来れば、やがて春が来る。

A7-23> 親カルガモが現れれば、子カルガモが現れる。

A7-24> ドアを開ければ、だれかいるだろう。

A III部 複文(1) 条件表現(1)

⑤ 「前件－後件」が「方法(手段)－目的」の関係

前件が後件(目的)を実現させるための方法(手段)であるもの。

A7-25> このスイッチを入れれば、動きます。

A7-26> これは冷蔵庫で保管すれば、1か月もつ。

A7-27> クラスの総点を学生数で割れば、平均点が出る。

⑥ 「前件－後件」が「状況－評価・感想」の関係

前件の生起が話者の評価や感想を導くもの。

A7-28> これだけできれば、合格だ。

A7-29> ここまで来れば、もう安心です。

A7-30> こんなことが分からなければ、仲間にするわけにはいかない。

⑦ 「前件－後件」が「状況－話者の主体的対処(対自・対他)」の関係

前件の生起が話者の主体的態度の表明を導くもの。

A7-31> 雨が降れば、中止します。

A7-32> 当選すれば、がんばりたい。

A7-33> 時間があれば、行きなさい。

以上のそれぞれに共通して、対比的な気持ちが含まれることもある。

A7-34> 車で行けば4時間だが、電車で行けば3時間で行ける。

A7-35> 晴れれば実行し、降れば延期する。

しかし、一般に同一カテゴリーのものを並べれば、自然に対比になることも事実である。

A7-36> 車で4時間、電車で3時間。

バの場合には、バに含まれる「は」の働き(A6.6 及び『文法』3.1③参照)により対比のニュアンスが多少増幅されているものと考えられる。

A7.9 タラの場合・ナラの場合

以上において扱ったのは、バによる条件表現である。次にタラ・ナラによる条件表現についても扱う必要がある。

A7章 条件

タラは元来タラバであり、バの一変種である。この変種は、バにアスペクトの要素を組み込むために発生したものと考えられる。

ナラは元来ナラバであり、やはりバの一変種である。バが单一の出来事を条件とするのに対して、ナラはその出来事を含む状況の生起を条件とする。

タラの基本的な構造と意味についてはA8章で述べるが、ナラについては次の機会を待ちたい。

タラ・ナラが時空モデル上でどのような扱いになるかについては、非常に興味深いところではあるが、やはり次の機会を待ちたい。

トについても次の機会を待ちたい。

A7.10 バ・タラ(バ)・ナラ(バ)・トの特徴

この条件基4形式の特徴については表A7-1のようにまとめるにとどめる。

バ・タラ(バ)・ナラ(バ)・トの特徴

表A7-1

バ	バに含まれるハのために前件全体が主題化され、主情性を帯び、(目的とする)後件生起のためには前件の生起で十分である等のニュアンスを帯びる。 バの使用は仮定条件が中心である。確定条件では十分・非難等の気持ちを帯びる場合に限定され、それ以外はタラ(バ)に譲った。
タラ(バ)	バの一変種。条件に開始・区切り・完了のアスペクトを導入するために生じた。アスペクト導入により前件の実際性・具体性が強まった。同様に口語的的性格も強くなった。
ナラ(バ)	バの一変種。出来事ではなく(特に他者の設定する)状況の生起を条件とする。
ト	前件を条件として示し、後件との論理(因果)関係を導く。バの主情性と対照的で、前件の客觀性を高く保つ。そのため後件に話者の主体的表現を置くことができない。

A7.11 ノデ・カラとの対比

「条件」は前件(原因・理由・契機)の成立を待って後件(結果・帰結)が成立することを示すものであるが、ノデ・カラには「条件」の要素はない。前件を単に「原因・理由」としてとらえ、「結果・帰結」である後件を導く。

ノデ・カラは前件の舟が未来・現在・過去の確定水域(100%)、不確定水域(50%)にある場合に使用できる。「条件」が非実現水域(0%)でも使用できるのと対照的である。

◎ 「彼はもし生まれ変わったら、落語家になったでしょう。」は 図A7-14 の△と▲を置き換えた関係のものになる。ただし、実現点では「生まれ変わる」の舟の結果状態継続中の部分が仮想実現する。仮想後件は50%水域にある。

出来事生起の確実性には7つのコースがある? → p. 73

出来事生起の確実性は時間と組み合わせて12種類ある? → p. 77

読みバ分かる。「バ」とは何? → p. 79

「バ」には「ハ」が入ってる? → p. 79

読みバ分かる。バはなぜ文を続けることができるのか? → p. 81

「モシ」って何? → p. 90

「Aすれば、B。」の前件は12種類ある? → p. 91

「Aすれば、B。」の「バ」で私たちは何をしてるのか? → p. 96

前件と後件の因果関係は7種類? → p. 103

「タラ・ナラ」は「バ」の変種? → p. 105

花が咲いたら～ タラはなぜ条件が示せるのか? → p. 107

「咲けば」は-eba、「咲いたらば」は-aba。なぜ違う? → p. 110

バの構造とタラの構造は何が違うのか? → p. 109

バとタラの関係は? → p. 113

バやタラは4つの要素で使用法の特定ができる? → p. 115

A 8 章

タラの構造と意味

この章では、タラが条件を表せるのは、タラが元来タラバであり、バの一変種であるからであることを述べる。バとタラの関係、相違について述べ、構造図で示す。

A8.1 タラとバの違いは何か？ タラはなぜ条件を表せるのか？

「たら」と「ば」はどう違うのか、と、この両者は対比させられることが多い。また、両者の結合形らしい「たらば」についてどう考えればよいのか疑問を発せられることもある。「たら／ば／たらば」この三者の関係はどうなっているのだろうか。

そもそも、なぜ「たら」は条件の意味を持つのだろうか。形態的には

=t-θ=ar-a

という構成をしている。下線部は「局面変化完了認知基」(A4章)であるから、この中に条件を表す要素が入っているはずはない。とすれば、最後の -a が条件の意味を持つ形態素のはずである。この -a とは、いったい何なのだろうか。

A8.2 タラはタラバの省略形

現代語ではタラという形態をよく使用するが、これは元来タラバであり、バが省略されたものである(ナラも元来ナラバであった)。このことに関して山口『日本語接続法史論』(p.107) は、こう述べている。

「ならば」「たらば」は、室町期におけるその一般化・標準化とともに次第に熟合化し、それが本来両句の関係表示を担った「ば」の脱落を許すことにもなる。

また、『国語学研究事典』（「接続助詞」p. 308）では、こう述べている。

近世に入ると、前期の上方語では「未然形+ば」で仮定条件を表わすことは前代と同じであるが、一方、「已然形+ば」と、「ば」を伴わない助動詞「なら」「たら」のみで、仮定条件を表わす言い方が現れた。近世後期の江戸語では、「あらば」「思はば」「言はば」など限られた用法を除いて、「已然形+ば」「…なら・…たら」で仮定条件を表わすことが多くなり、この形式が現代まで続いている。

（下線は引用者による。）

さらに、『助詞助動詞詳説』(p. 145)にはこうある。

（助動詞「た」の仮定形「たら」は）

「たらば」の形で、仮定条件・既定条件あるいは、前提条件を示す。しばしば、「ば」を伴わずに「たら」だけで用いられるが、この場合の「たら」は接続助詞と認めてよい。

つまり、タラが何であるのかを考えるために、バの省略される以前の本来の形式「タラバ」の構造を考えればよいのだということになる。

A8.3 タラバの構造、タラの構造

そこで、タラバの構造について検討してみよう。

我妹わぎ子むこと見みつつ偲しのははむ沖おきつ藻もの花はな咲咲きたたらばば我わに告おげげこそこそ <万1248>

（愛妻と見なして偲ぼう 沖の藻の花が咲いたら知らせておくれ）

（小島・他 1994）

この歌の「花咲きたらば」という部分の構造はこうなっている。

A8章 タラの構造と意味

hana- \emptyset_1 sak-i=t- \emptyset =ar-am-u= \emptyset 包- \emptyset_2 -Fa

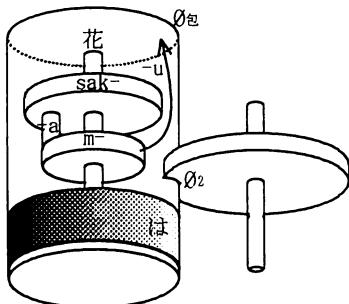
下線部はA6章で扱ったバの部分(図A6-1)である。これを「花咲かば」の形

hana- \emptyset_1 sak-am-u= \emptyset 包- \emptyset_2 -Fa

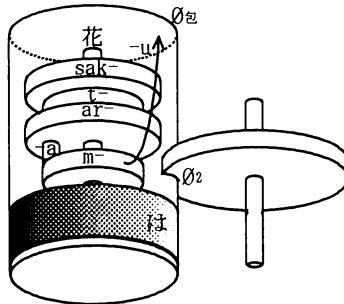
と比べてみると、「咲かば」に $-i=t-\emptyset=ar-$ の部分が付加されて「咲きたらば」が成立していることが分かる。「咲きたらば」の構造を得るためにには「咲かば」の構造(図A8-1)に $=t-\emptyset=ar-$ の部分を付加すればよいということになる。そこで、実際に付加してみると、図A8-2 のようになる。

$=t-\emptyset=ar-$ は「局面変化完了認知基」であるから、 $=ar-$ の属性としての大きさは $=t-$ と同じでよい(『文法』10.4, 10.5)のだが、ここでは $-am-$ との関係を見やすくするために少し大きめにしてある。

この構造図により、タラバの構造は基本的にバの構造をしていることが分かる。バの構造は、前章で明らかになったように、確定・不確定・非実現・反復の条件を意味する構造なのであるから、基本的にバの構造をしているタラバもそれらの条件を表すことになる。



図A8-1 咲かば



図A8-2 咲きたらば

タラは、タラバのバが省略されて表層へ音描写されたものなので、構造そのものはそのまま保たれている。ここから、なぜタラが条件の意味を持つのかが理解できることになる。

また、A8.1 での、 $-a$ とはいいったい何なのか、という疑問にもこれで答えることができる。 $-a$ とは「ば $-am-u=\emptyset$ 包- \emptyset_2 -Fa」の先頭部分であり、バの一部なのである。それで、後ろを省略された $-a$ だけで条件の意味を持つよ

うに見えるのである。

タラバがなぜタラという形を生じたのかと言えば、それはやはり省力化であるだろう。バを省略してタラとしても、ほかに同じ語形の意味の似た語はないから誤解は生じない。とはいって、さらに省力してラを消してタのみにするまでには至らなかった。タという局面変化完了認知基がほかにあり、混同される結果になるからである。

A8.4 タレバ は タリヤ を介して タラバ に

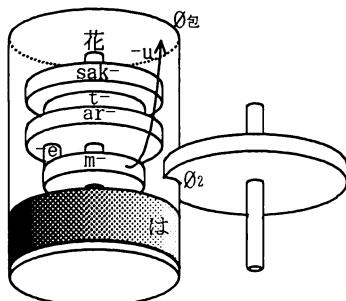
咲けば sak-eba は -eba なのに、

咲いたらば sak-i=t-∅=ar-aba は、なぜ -aba なのか

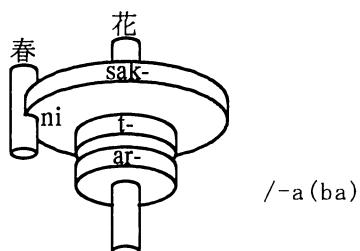
タラバにも已然形の問題（「タレバ」の形式）がある。バだけのときは、A6.7 及び A6.8 で論じたように、包含実体内の “-a” に “-e” が代入され、
 $sak-\underline{a}ba \rightarrow sak-\underline{e}ba$

となり、“-a” が “-e” に取って代わられたわけであるが（図A6-7、図A6-8）、タラバでは逆に “-a” が “-e” をはねのける結果（タレバ→タラバ）になっている（図A8-3、図A8-2）。

$=t-\emptyset=ar-\underline{eba} \rightarrow =t-\emptyset=ar-\underline{aba}$



図A8-3 花咲きたれば



図A8-4 春に花が咲いたら (ば)
(簡略表示)

この理由は、タレバが熟合化によりタリヤ・タラへと変化し、これが近世後期において（タラバのバを省略した）「タラ」と語形同化を起こし、それ

がそのまま現在に至ったからである(山口 1996, 松下 1928)。

これを「花咲きたれば」で考えると、こうなる。

hana- \emptyset_1 sak-i=t- \emptyset =ar-am-u= \emptyset 包- \emptyset_2 -Fa

という形の構造(図A8-2)は次のように音描写されていた。

① hana- \emptyset_1 sak-i=t- \emptyset =ar-aba (咲きたれば <もし咲けば>)

が、この構造を、A6.7で述べたのと同じ理由で、已然形の-eが借用して、次のような構造を作り出しました。

hana- \emptyset_1 sak-i=t- \emptyset =ar-em-u= \emptyset 包- \emptyset_2 -Fa (図A8-3)

この構造は次のように音描写され、

② hana- \emptyset_1 sak-i=t- \emptyset =ar-eba (咲きたれば <咲いたので>)

さらに次のように縮約描写されるようになった。

③ hana- \emptyset_1 sak-i=t- \emptyset =ar-ya (咲いたりや <咲いたので>)

④ hana- \emptyset_1 sak-i=t- \emptyset =ar-a (咲いたら <咲いたので>)

③の-yaにはbaが入っており、④の-aにもbaが入っていることになる。(「咲きた」が「咲いた」になる音便についてはA3.5⑦参照。)

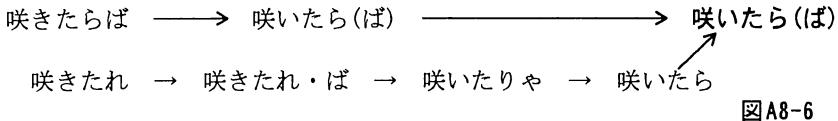
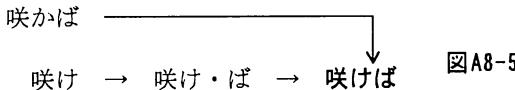
この④が①のbaの省略された⑤と同じになった。

⑤ hana- \emptyset_1 sak-i=t- \emptyset =ar-a(ba) (咲いたら(ば) <もし咲けば>)

この-aにはbaは入っていない。

そしてついに、④から「ば」を復元しようとしても、もはやebaには戻らなくなり、まったく⑤と同化してしまった。(仮に④にバを加えて「咲いたらバ」とすると、この形式には2つのバが入っていることになる。)

「咲かば」(未然形)は「咲けば」(連用形)に吸収され、「咲きたれば」(連用形)は逆に「咲いたらば」(未然形)に吸収された。この過程を概念図で示せば、図A8-5、図A8-6のようになる。



簡略化していえば、現在使用されている「バ形」

咲けば sak-eba, 食べれば tabe-reba

は、未然形に対する已然形による乗っ取りが生じた(A6.11)結果の形であり、
「タラ形」

咲いたら (ば), 食べたら (ば)
sak-i=t-θ=ar-a(ba), tabe-θ=t-θ=ar-a(ba)

は、未然形のまま今日に至っているわけである。(過去・現在100%<已然形
が表す確定条件>では結果的に已然形が未然形に吸収される形となった。)

本節冒頭の疑問に対してもこのようない形で解答が与えられる。

A8.5 現代語のタラ(バ)の構造

現代語のバの構造を図A6-9 のように簡単に示すことにしたので、これに
応じて、タラ(バ)の構造も図A8-4のように簡単に示すことにしよう(図A6-18
も参照)。

-a(ba)の名称は『文法』5.2 では「展開描写詞」としたが、以上の検討に
より、=t-θ=ar-a(ba) 全体で「局面変化条件基」と呼ぶ方が適切であること
になった。これはバを「条件基」と呼ぶ(A6.11)こととしたことと呼応して
いる。(-n=ar-a(ba) は「状況条件基」と呼ぶことになるだろう。)

A8.6 バとタラの関係

- ① バとタラはともにバの構造なのであるから、両者ともに、前件の「生起そのもの」を条件的な接続形式にするという機能を持っている。
- ② その一方、両者には $=t-\theta=ar-$ の部分の有無という形での構造上の違いがある。バにはこれがなく、タラにはこれがある。 $=t-\theta=ar-$ は「局面変化完了認知基」なのであるから、これを持つタラは特に「局面変化」を意識する、アスペクトに敏感な形態であることになり、これを持たないバは、これを特に意識しない、前件を単に生起としてとらえる形態であることになる。

タラは前件に「開始・区切り・完了」のアスペクトを持ち込むので、前件の具体性・実際性を高めることになり、結果として口語性を高めている。

バは仮定性と条件性を、タラは条件性と局面変化認知性(アスペクト性)を持つ、と言える。

③ ここから、バは局面変化(アスペクト)に敏感な前件には対応できない、つまり、タラに比べて、バは状態性前件なら問題はないが、特に既に生起した確定的な前件や、生起の確実な動作性の前件を開始や完了のアスペクトでとらえる場合には不向きだということになる。タラにはこの制限がない。

④ それで、バは「確定前件」を示しにくいことにもなり、主として「仮定前件」を示すことになる。タラは「仮定前件」「確定前件」の両方を示すことができる。

A8.7 タラのテンスとアスペクト

タラは局面変化を意識する形式である。そこで、テンスとアスペクトの関わりの中でどのような形で使用されるのかを見ておきたい。以下に例文とともに、テンス・アスペクトの組み合わせのリストを掲げる。

「前件の確実性」は、ここでは、未来では「不確定」を、現在・過去では「確定」を使用する。「前・後件の関係」(A7.8 で述べた①～⑦)については特に限定しないでおく。アスペクトに関わらない「◎」(『文法』17.1)も除外しておく。[2' /] [2' /!] 等の記号の意味についてはA4.4[B]参照。

a) 未来不確定前件 (仮定前件なので、バも使える。)

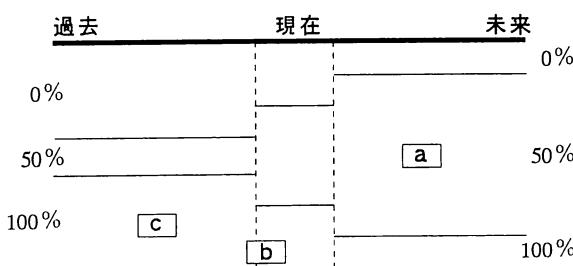
- [07] 未来開始 彼女が着物を着たら、私は手伝います。
- [02' /] 未来進行中 彼女が着物を着ていたら、私は手伝います。
- [03] 未来完了 彼女が着物を着たら、写真を撮ります。
- [04' /] 未来結果継続中 彼女が着物を着ていたら、写真を撮ります。
- [05] 未来結果消滅 彼女は着物を着ていたら、すぐシャワーを浴びる。
- [06'] 未来記憶継続中 彼女が5回着物を着ていたら、当日は大丈夫だ。

b) 現在(直近過去)確定前件 (確定前件になるので、バには制約がある。)

- [77] 現在開始 (あつ,) 着物着たら、カメラ持ってくるよ。
- [22' /!] 現在進行中 (あつ,) 着物着いたら、しばらく待つよ。
- [33] 現在完了 (あつ,) 着物着たら、写真撮るよ。
- [44' /!] 現在結果継続中 (あつ,) 着物着いたら、写真撮るよ。
- [55] 現在結果消滅 君、着物着いたら、いまシャワー浴びるね。
- [66' /!] 現在記憶継続中 何回も着物を着いたら、今日は着るのが楽だ。

c) 過去確定前件 (確定前件になるので、バには制約がある。)

- [67] 過去開始 彼女が着物を着たら、彼はカメラを取りに行った。
- [62] 過去進行中 彼女が着物を着ていたら、電話が鳴った。
- [63] 過去完了 彼女が着物を着たら、ちょうど彼が来た。
- [64] 過去結果継続中 彼女が着物を着ていたら、ある女性が声をかけた。
- [65] 過去結果消滅 彼女は着物を着ていたら、すぐシャワーを浴びた。
- [66] 過去記憶継続中 何回も着物を着ていたら、当日は問題なかった。



図A8-7 a, b, c それぞれの舟の位置

A8.8 バ・タラを4要素で特定する

以上に述べてきたことから、バやタラは次の[A]～[D]の4つの要素を用いれば、その使われ方を特定することができるところが分かる。これによりバやタラの使用の全体を体系的に把握できる可能性が生まれる。

- [A] 前件出来事の時間的位置……過去・現在・未来／以前・同時・以後
- [B] 前件出来事生起の確実性……確定・不確定・非実現・反復
- [C] 前件出来事のアスペクト……開始・進行中・完了・結果継続中・
結果消滅・記憶継続中／まるごと
- [D] 前件・後件の関係……①～⑦のいずれか

例えば、

「このバ(タラ)は、[A]未来・[B]不確定・[C]進行中を前件とし、
前件・後件が[D]②の関係にある」

というような表現になる。

「この本を読めば、元気が出る。」という文のバであれば、

「未来・不確定・まるごと・②／③／⑤」(あなたがもし読めば)

「現在・反復・まるごと・②／⑤」(だれでも読む人は)

「この本を読めば、元気が出た。」という文のバであれば、

「過去・反復・まるごと・②／③／⑤」(かつての私)

「過去・非実現・まるごと・②／③／⑤」(私は読まなかった)

となる。

この4要素の組合せのありうる全体を知ることによって、バやタラの使用の全体を体系的に把握できるようになるだろう。また、主語・述語に関してなど、さらに必要な副次的な要素とその扱い方も明らかになり、より精細に把握できるようになるはずである。

4要素の組合せの全体は表A8-1 によって得ることができる。ここでは1枚の表で表してあるが、[A]の「前件の時間的位置」の個所を未来・現在・過去・以後・同時・以前に分け、別の表とすると、より扱いやすくなるだろう。

実際に生成されるバ・タラ条件文をこれらの表の中のしかるべき位置に置

A III部 複文(1) 条件表現(1)

していくことによって、バ・タラの使用の全体の傾向が明らかになっていく。

あるバ・タラ条件文をこのような表のどこかに位置づけることができるようになるということは、その条件文がどのようなものであるかが「分かった」ことを意味することになる。

なお、この表に後件の時間的位置や確実性等を加えることも考えられる。

4要素によるバ・タラの特定表

表A8-1

[A] 前件の時間的位置	[B] 前件の確実性	[C] 前件のアスペクト	[D] 前件・後件の関係
絶対テンス (直近)未来	確 定	◎	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
		開始	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
		進行中	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
		完了	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
		結果継続中	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
		結果消滅	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
		記憶継続中	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
	不 確 定	◎	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
		開始	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
		進行中	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
		完了	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
		結果継続中	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
		結果消滅	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
		記憶継続中	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
相対テンス 以後	非 実 現	◎	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
		開始	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
		進行中	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
		完了	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
		結果継続中	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
		結果消滅	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
		記憶継続中	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
	反 復	◎	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
		開始	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
		進行中	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
		完了	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
		結果継続中	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
		結果消滅	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦
		記憶継続中	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦